

ザンビア・ミオンボ林における焼畑耕作と市場経済化の波

疎林での伝統的な焼畑を行う村が、政府が推進する農業政策により市場経済化の影響を受けた。伝統農業の拠り所とする疎林の状態が異なる 3 村の対応を調査した事例を紹介する。

■基礎情報

①気候

大部分は温帯で、5～8月は低温で乾燥、9～11月は高温乾燥、12～4月が雨期となる。
年平均気温 20.4℃ 年降水量 1,032.8 mm

②国土面積と人口

75.3 万 km²、1,215.4 万人

③民族

ベンバ族・タンブカ族・ニャンジャ系・トンガ族・カオンデ族・ルンダ族・ルヴァレ族・ンコヤ族・ロジ族など 73 民族

④宗教

キリスト教 82.4%・伝統信仰 14.3%・バハーイー教 1.8%
・イスラム教 1.1%

⑤土地利用

農地〔耕地 529 万 ha (7.1%)・
牧場と牧草地 3,000 万 (40.4%)〕・森林 4,245 万 (57.1%)



1. 地域概況

ザンビア共和国の北部一帯にミオンボ林と呼ばれる疎林が広がっている。樹高 15～20m、樹間距離 3～5m で、マメ科植物が優占する。ミオンボ林の分布域は年間降水量 800～1200mm で、雨期と乾期が明瞭に分かれる。民族はベンバ族で、ミオンボ林帯でチテメネという焼畑耕作を行う農耕民族である。

2. チテメネ耕作

雨期が終わる 5 月から 9 月半ばにかけて、ミオンボ林内の耕作予定地周辺から樹木の枝葉を切り集める。枝葉を耕作予定地に腰の高さまで積み上げて乾燥し、10 月に火入れを行う。1 世帯の平均耕作地面積 40～49 アール程度で、一人当たり平均 9 アールのチテメネ耕作ができれば十分な食料が得られる。

火入れ後まずキャッサバが植えられ主食のシコクビエが播種される。2 年目は豆類、3 年目には初年に植えられたキャッサバが収穫される。場合によって 4 年目にインゲンマメが栽培される。チテメネの縁辺部にはカボチャや食用ヒョウタンが植えられる。その後、畑は放棄されて休閑地となる。30 年以上経過すればミオンボ林が回復して再び耕作が可能になる。

3. 市場経済化の波

ザンビア政府は1970年代後半から農業政策を転換し、化学肥料やハイブリッド種子の購入に補助金を出し、トウモロコシの生産者価格を引き上げた。これを期に換金作物としてのトウモロコシ栽培が始まった。ベンバの人々は、トウモロコシ栽培を始めてもチテメネ耕作は手放さず、両立させてきた。1990年代には農業関連の補助金が引き下げられ、農業関連市場が完全自由化された。これによって肥料の供給量が不安定になるなど、トウモロコシの生産基盤はゆらぎはじめた。

4. ミオンボ林にある3村の異なる対応

- 市街地から35km離れた場所にあるK村では、自由化の後、早々にトウモロコシ栽培をやめて、チテメネに依存した生活に戻った。トウモロコシ栽培の衰退により、シコクビエやキャッサバなどに需要が出たため、村人はチテメネから収穫されるこれらの販売に着手した。この村人は、豊かに広がるミオンボ林を利用した伝統農業を維持し、自給生活に根ざしながらも市場経済化に対応した生計戦略をとっている。
- K村よりも市街地にやや近い場所にあるM村でも、チテメネを生活の軸に据えなおし、シコクビエの販売戦略をたてた。しかし、1990年頃この地の近隣に政府が再入植地を制定したため、新住民とミオンボ林をめぐる土地所有問題が起きた。M村ではチテメネを大規模化できず、伝統耕作だけに依存した生計が立てられない。トウモロコシ栽培に代わる現金収入の道をさぐっている。
- 市街地に近い場所にあるN村では1970年頃から木炭生産をしていた。チテメネの耕作面積は前2村よりも少ない。この村は早々にトウモロコシ栽培を生計の中心に据え、耕地の開墾を兼ねた炭焼きにも力を入れた。このためにミオンボ林は劣化し、チテメネを放棄する村人が現れた。トウモロコシ生産の基盤が揺らいだ時にはミオンボ林がすでに荒廃しており、村人は選択の幅が狭い中でさまざまな努力を続けなくてはならなくなった。しかし一方で、市場経済化に載ることができた資金力のあるごく一部の村人は、トウモロコシ栽培を大規模安定的に経営している。

1990年代の政治・経済状況の変化が、ベンバの村々の生業に変化をもたらした。伝統的な生業であるチテメネ耕作を支えてきたミオンボ林の状態がこれら3つの村の対応に違いをもたらしたと捉えることができる。SATOYAMA イニシアティブの視点から、示唆に富んでいる。

参考文献

大山修一. 2002. 「市場経済化と焼畑農耕社会の変容ーザンビア北部ベンバ社会の事例」, 掛谷誠編「アフリカ農耕民の世界」京都大学学術出版会, p3-49.